
ルームメイトのお姫様

ちまこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルームメイトのお姫様

【Nコード】

N1129S

【作者名】

ちまこ

【あらすじ】

田舎に建てられた中高一貫教育を提供する全寮制の男子校、篠國学園。何の楽しみもないその場所に、今年16歳になる木ノ倉哲平は高倍率の編入試験を見事にぐり抜け、高等部へと編入してきた。家を離れての生活に不安と期待で胸がいっぱいだった哲平は、全くの予想外な現実に見舞われる。入寮するとともに周囲の敵意に満ちた視線にさらされてしまったのだ。

その原因はルームメイト！？

哲平の波乱に満ちた高校生活の幕は開けた！

ルームメイトのお姫様 01

篠國学園。

雄大な山脈を背に建ち、中高一貫教育を行っている全寮制の男子校である。

豊かな自然と充実した設備を有する広大な敷地、そして多方面に亘る分野に排出できる優秀な人材を育成するための教育を提供することを特色として掲げている全国でも有数の進学校だ。

だが実際はといえば、田舎に学園があるために右を向いても左を向いても山と田んぼと畑ばかり。知り合う異性は農作業をするおばさんや小さな商店を開くおばあさん、という具合だ。徒歩圏内に娯楽施設というものは一切無く、一番近場でもバスで一時間弱かかり、それでもあるのは昔流行ったゲーム機を置くスーパ―や哀愁漂うボーリング場だ。全寮制という閉ざされた空間の中で、切実に生徒たちは娯楽に飢えていた。携帯電話やインターネットの普及によりある程度の刺激は受けられるといっても、得られるものは所詮は情報のみである。それだけで十代の研ぎ澄まされた感性を満足させることは難しいだろう。

そんな世間から逸脱したような場所に、今年16歳になる木ノ倉哲平は立っていた。

毎年10人程度募集される高等部への編入試験を受け、見事に合格を果した哲平は、今年の4月からこの篠國学園高等部に通うことになったのだ。当然寮に入ることとなり、哲平は今日、入寮を迎えることになっていた。

男子校に進学するに当たっては、中学時代の友人たちから散々に茶化されてきた。「ホモがいるぜ」と冗談交じりに言われ、「ま、お前みたいな顔も身体も平凡な奴なら相手にもされないだろうけどな」と笑われた。言われなくても分っている事をいちいち言うてる悪友たちに、哲平は怒る事もない。これが彼ら特有の激励なのだ

と知っていたからだ。そして、茶化されるだろう事を予想しながらも全寮制の男子校を選んだのが他ならぬ自分の意思だということもあつた。

（そりゃ、俺だって可愛い女の子のいる普通の学校が本当はいいんだけどさ）

哲平は心の中でばやく。

（でも・・・家にはいれないし）

哲平は溜息を落とす。

いけない、ではなく、いたくないというのが正解だ。

（今頃俺がいなくて母さんはうかれてるんだろうな）

年甲斐もなくはしゃぐ母親の姿を容易に思い浮かべることが出来て、哲平はもう一度、深く息を吐き出した。

哲平には物心付いた時から父親がいない。兄弟もなく、哲平は女手一つで母親に育てられてきたのだ。他に親類もいないためか、親子の絆は何処よりも強いと感じている。必死に自分を育てようとしてくれる母が哲平には誇りでもあつたし、男である自分が母を守らなければという強い責任感のようなものを幼い頃から感じていた。

自分と母はずっと変わらない。漠然とした確信を哲平は無意識に持っていた。それがある日突然、揺らいでしまったのだ。

決めたら何があつても貫き通す頑固者の母親が、何の前触れもなく、一人の男を紹介してきたのが全ての始まりだ。

「結婚する事にしたから」と重大発表を世間話のように話す母に、哲平はうんともすんとも言えなかった。

母にだって母の人生がある。頭では分つていても、哲平は母が一人の女である事をすっかり失念していたのだ。それを突然思い知らされてしまった。

母の隣に座る男は、誠実で優しそうな男だった。どこか頼りないところも見受けられるが、それは母の持つ豪快さでカバーできるのだろう。

幸せになってくれるのなら再婚も構わない。哲平は努めて冷静

に母に言った。

「必ず幸せにするよ」と神妙な顔で言う男に、哲平は深々と頭を下げたのだった。

それが年末の頃だ。

年が明けて本当に結婚してしまった母は、男を自分たちの住むマンションに迎え入れた。そして哲平と三人の生活が始まったのだが、同時に哲平には苦難が押し寄せてきた。

今まで母親としての姿しか見せなかった母が、突然女としての姿を見せるようになったのだ。中睦まじい新婚二人は、哲平の前でも熱い視線を絡ませあう。別に母親を取られたと拗ねるほどマザコンではない。いちやつく姿を見て頬を赤く染めるほど純情でもない。ないのだが、照れてはにかむ母の姿を見た日には、哲平は思わず「気持ち悪い」と口を滑らせてしまった。直後に母には拳で殴られ、男には申し訳なさそうに何度も頭を下げられると、哲平は居たたまれなさで身を縮めるばかりだ。

「あんたも彼女作っていちやつきなさいよ」と真顔で母に言われて、何の反論も出来ない自分が情けない。

こうして哲平は、真剣に家を出ることを考えざるを得なくなったのだった。

彼女を作るよりもその方が簡単だというのがなんだか情けないが、それはとりあえず考えないことにする。

家を出るにあたって一番周囲を納得させられる方法として思いついたのが、全寮制の学校に進学する事だった。一人暮らしでも、寮でも下宿でも、何も家を出なくてもという周囲の、特に男の引きとめから逃れるための苦肉の策だった。自分が親子の関係を壊してしまっているのかと悲観する男と、余計なことをして私たちの新婚生活に水を差すなと噛みついてくる母の板挟みに、哲平は心底うんざりしてしまう。誰もが納得する形で家を出なければ、それが自分の義務なのだろうと達観した哲平がひねり出した理由が、この学校に進みたい、それが全寮制だから家を出るというものだった。篠國学

園が全国でも名の知れた進学校ということが、随分と哲平の主張を助けてくれた。母も男も、そう言うことならばと表だって反対をするようなこともなかった。私立の学校へ進むことで金銭的に負担を掛けてしまっただろうことについても、母は「それは子供の考えることじゃない」と気前よく賛成してくれたのだ。それは哲平にとっても嬉しかったし、いつか必ず親孝行をしてこの恩を返そうと決意した。ただ誤算だったのは、篠國学園が男子校という点と、思った以上にレベルの高い編入試験だ。男子校なのはこの際仕方がない。最低でも三年間、母が男といちゃつく姿を見せつけられることを思えば、周りが男だらけになろうともその方がまだましだ。ただ、編入試験に受からなければ元も子もない。生まれて初めて死にものぐるいで勉強をして、本当に自分はおかしくなったのではないかと思うほどに哲平は多大な情報を頭に詰め込んだのだった。

こうしてめでたく篠國学園に入学できたのだから、実際に学園を目の前にすると、その感慨は深いものだった。

まずは学園校舎を見ておこうとやってきた哲平だったが、昇降口近くに立てられたガラス張りの掲示板を前に、先ほどから立ち止まっている。

何度も首をかしげて、掲示板に張られている一枚の紙を熟読していた。

「・・・真奈姫の、休日？」

それは校内新聞のようだった。見出しに大きく書かれた文字を読み、哲平はもう一度首を傾けた。新聞には三枚のカラー写真が印刷されている。そのどれもが同じ人物を写していた。ショートヘアの目を見張るような美少女が微笑んでいる。どれもカメラ目線ではないので隠し撮りかもしれない。きつと自分を見てこの顔で微笑まれたら、ときめかない男はいないだろう。天にも昇る思いを味わえるかもしれない。・・・だが。

「これが真奈姫、か？可愛いけど・・・」

哲平は眉間に皺を寄せた。

哲平がいるのは男子校だ。そしてこれは校内新聞。写真の一枚は哲平が篠國学園へ入学するときに買った制服のブレザーに良く似たものを着たものもある。ということは。

「こいつ、・・・男か？」

哲平は写真を凝視する。何処をどう見ても美少女としか見えないが、それでも自分と同じ男子高生なのは確かのようにだ。

「いや、これは男じゃねーよな」

哲平は顔を近づけて、じっと一枚の写真を食い入るように見た。どこからどう見ても、やはり自分の買った篠國学園の制服を着ているようにしか見えない。身体の線も細いし、首も細いし、何より顔が女の子なのだ。

男装した女の子なのかとも思うのだが、それならばわざわざ校内新聞に載せる意味が分からない。そもそも、校内新聞とは校内の話題を載せる為のものはずだ。ならば・・・。

「・・・男なのか」

何故か酷く気落ちしたように、哲平は言葉を漏らした。

深く息を吐き出して、今度は睨みつけるように写真を見る。

「これ、詐偽だろ」

哲平の中で腹立たしさがじわりとこみ上げてきた。

俺のときめきを返せ、と勝手な文句を頭の中で並べ立てる。

哲平は踵を返して歩き出した。

（おかしなところに来ちゃった）

これから先の生活に多少の不安を覚えながら、哲平は自分の入る寮を目指した。

篠國学園には第一から第三までの寮棟がある。哲平が入寮するのは敷地の南に位置する第一寮棟だ。

鉄筋コンクリートの建物を見上げて、哲平は意気込んだ。

今日からここが自分の城なのだ。三年間頑張ろうと自分に喝を入れ、哲平は寮の敷居をまたぐ。期待と不安が胸の奥からこみ上げてきて、哲平の足取りは無意識にも浮き足立ったものになっていた。

寮内は入ってすぐにロビーが広がり、入り口のすぐ右手側には管理人室というプレートを掲げたドアがあった。

事前に郵送されてきた案内には、寮へ入ったらまず管理人に挨拶をするようにと書かれていた。管理人から寮の事に付いて聞くことになっているらしい。

深呼吸一つ、哲平は控えめに管理人室のドアをノックした。

だが、何の反応もない。

留守かとも思ったのだが、もう一度、今度は力を込めてドアをノックした。

「はいはい」という男の声が奥から微かに聞こえて、ようやくドアがゆっくりと開かれた。

顔を出したのは初老の男性で、開かれたドアの隙間から出した頭を上下に動かし、哲平の頭から足の爪先までを満遍なく見つめてくる。見慣れない顔のためか、管理人は考え込むようにしていた。ようやく何かに思い当たったのが、一度頷くと、改めて管理人は哲平を見た。

「編入生の木ノ倉君だね」

「はい。今日からここに入ることになりました。お世話になります」
哲平は腰を折り、管理人に頭を下げた。その態度に好感を覚えたのか、管理人の表情が柔らかいものへと変わっていく。

「こちらこそ、よろしくお願いしますね。えーと、それで君の荷物はすでに部屋に運んであるから。あと寮の説明は・・・と」

言いながら、管理人は内線でどこかへ電話をかけた始めた。

二言三言言葉を交わし、受話器を置くと哲平を見る。

「今寮長さんが来るからね。彼にいろいろ聞いてくださいね」

「・・・はあ」

どうやら管理人は何もしないらしいと分り、哲平は大人しく寮長を待つことにした。

待っている間にゆっくりと建物内に視線をめぐらしていく。年季の入ったコンクリートの壁はそこらかしこで黒ずみ、汚れが目立っている。窓辺に置かれたソファは古いのかくたびれた感じをかもし出していた。特に飾りつけもなく、よく言えば無駄のない造りと言えるだろう。

住めば都、哲平はそう思うことにした。

「おまたせしました」と声が聞こえて振り返ると、またも初めて見る顔の男が管理人に頭を下げているところだった。歳は哲平とそれほど変わらない感じだから、きっとこの寮生なのだろう。長身で綺麗な顔立ちをしている。少し性格のきつさが目元に現れていて、それが余計に美人顔を引き立たせていた。

（・・・氣にくわん）

哲平はひっそりと思っていた。

もともと162センチという自分では納得できない低い身長にコンプレックスを抱いている哲平は、自分よりも背の高い男が基本的には気に食わないのだ。世の中には自分よりも背の高い男のほうが多いので、哲平はこの世の大半の男が気に食わない。だがそれを理由に交友関係を限定するほど子供でもないもので、とりあえず哲平は現れたこの綺麗な男に軽く頭を下げてみた。

「ああ、木ノ倉君。彼が第一寮棟の寮長をしている木坂衛君だ」

管理人に紹介をされて哲平はもう一度、今度はしっかりと頭を下げた。

「木ノ倉哲平です。よろしくお願いします」

「ああ」

衛は短く言う。綺麗な顔を無表情に保っているのです、どこか不機嫌そうな印象を受けた。

「木坂君、後はよろしくね」

管理人の言葉に、衛は小さく頷いた。管理人はそれに満足したのか、そそくさと管理人室に入っていつてしまった。

ボタン、と閉められた管理人室のドアの音が、やけに大きく響いた。

衛と二人取り残された哲平は、なんとも気まずい思いを抱えてしまう。そろり、と哲平は衛を見上げた。見上げなければならないことに腹が立つ。

「部屋はこっちだ」

そう言つて、衛は踵を返すと、哲平を気にすることなく歩き出してしまった。哲平は慌てて衛の後に付いて行く。

「朝食は朝の５時から８時まで。夕食は１７時から２１時までだ。食堂は二階にある。風呂は最上階。門限は２２時。外出時は管理人の山本さんに申請書を出せ。無断外泊は処罰の対象となる」

歩きながら、衛は言葉を連ねていく。哲平が口を挟む隙間は全くなかった。

「第二、第三寮棟へ勝手に侵入することも基本は禁止だ。その反対にもぐりこませる手引きもするな。部外者も然り。家族が来る場合は一階の応接室に通す事になる」

早足で歩く衛に着いていくためには、哲平は小走りにならなければならない。歩幅の違いに釈然としないものを感じるが、それを言うのはプライドが許さない。哲平はひたすら黙って衛に付いて行った。

「ここがお前の部屋だ」

階段を上り歩き続けた衛は、突然ぴたりと立ち止まった。ちらりと、振り返りながら哲平を見下ろす。衛は一枚のドアを顎で指し示した。

ポケットから鍵を一つ取り出すと、衛は無言で哲平に差し向ける。哲平が鍵を受け取ると、衛はすぐに手を引っ込めた。

「何か質問は？」

聞かれて、哲平は周囲に視線を走らせる。

寮の規則等については事前に貰っていた案内に同じ事が書かれている。それについては何の疑問もない。生活をしていけばおのずと分ってくる事も多いだろう。寮内の配置についても見取り図があるので問題はない。今哲平が気になる事といえば、唯一つだった。

「あの・・・」と遠慮がちに哲平は口を開いた。

途端に衛にじろりと睨まれて、哲平言葉を詰まらせてしまう。自分が聞いてきたくせに、と僻みっぽく思いながらも哲平は気を取り直して言った。

「俺、何かしましたか？」

「ああ？」

衛が眉を寄せ、あからさまに威嚇してくる。顔に似合わず乱暴な言動をする男だ、と哲平は感じた。顔と性格が必ずしも比例するとは言いきれないので、これが衛の人柄というもののなのだろう。

哲平はもう一度、ちらりと視線を周囲に向けた。

先ほどから、周囲に同じ寮生たちが現れては自分を見て、なにやら影で囁きあっているのだ。耳に届く言葉の中には、哲平に対する誹謗中傷といった意味合いのものも多く含まれている。寮に着たばかりの自分が何故ここまで敵意をむき出しにされなければならないのか、哲平には全く理解できなかった。哲平の周辺で、一定の距離を空けて集まってきたりしている顔ぶれの中に、哲平の知っている者は一人もいないのだ。初対面のはずなのに、なぜか自分は注目を浴びている。

「何だか喧嘩を売られてるみたいで気分が悪いというか」

哲平はぼそぼそと言う。

「基本的に俺って売られた喧嘩は買う主義なんすよ。でも来たばかりで喧嘩を買ったりしたら、問題になりますよね」

自分は気の長い方だと哲平は思っている。それでもさすがに我慢の限界が近くなっていた。言いたいことがあるならば正面きって言うてこい、と言ってやりたい。身長が低い分なめられないようにと、

昔から喧嘩の腕だけは鍛えてきたのだ。多勢に無勢であつても、簡単に負けてやることはないし、一対一の勝負であれば大体に勝てる自信もある。来るなら来い、というのが哲平の性格だった。

気後れすることなく言い放った哲平に、衛は少しだけ驚いた表情を浮かべた。

「騒ぎを起こせば問題にはなるな。暴力沙汰は処分の対象になるだろう」

律儀に答えた衛に、哲平はにんまりと笑った。

「先輩つて、真面目っすね」

哲平の言葉に、衛は不愉快そうに眉間に皺を寄せる。その仕草がまた、哲平には面白かった。

「だって、俺のことすげー気に食わないって感じなのに、仕事はきっちりこなしてるからさ」

「・・・確かに」と衛は重い口を開く。

「俺はお前の事が気に食わないな」

「俺、何かしました？」

「ここに来て早々で、お前は何かをやらかしたのか？」

「いえ、それが全く記憶にないんですよね」

「だろうな」

衛は鼻で笑うと、踵を返して歩き去ってしまった。

質問の答えは全くもらえていない。哲平は呼び止めるタイミングを逃してしまい、ただ呆然と衛の背中を見送るしかなかった。

あとに残されたのは哲平と、自分に集中する居心地の悪い視線だけだった。

ルームメイトのお姫様 02

513号室。

初めて鍵を差し込む瞬間は、緊張と期待と不安で満たされる。

カチャリ、と鍵の開く音を耳にしたとき、哲平の胸の鼓動は最高潮に達していた。

ゆっくりとドアを開ける。この先に自分の部屋がある。そして三年間共に暮らすルームメイトがいるのだ。

（どんな奴だろう）

第一印象が大切だ。哲平は第一声を頭の中でシュミレーションしていく。

（ここは一つ、フレンドリーにいくか）

哲平は手に力を込めてドアを大きく開いた。

（・・・あれ？）

三度ほど瞬きを繰り返して、哲平は室内を見回す。そこには人の影も形も何もなかった。

（・・・なんだよ。緊張して損した）

哲平は誰もいない室内をもう一度注意深く見回して、深く息をついた。

寮は二人一部屋のはずだ。当然、哲平の与えられた部屋にはルームメイトがいるはずなのだが、その姿がどこにもない。今は出かけているのだろう。何も出迎えて欲しいとは思っていなかったのだ、哲平は特に何を思うでもなく室内に手荷物を降ろした。ルームメイトにはいずれ必ず会えるのだから、急ぐこともない。

「とりあえず・・・ちやちやっと片付けとくか」

小さく息を吸い込んで、哲平は独り言を呟いた。

室内には使われた形跡のある壁際の机と二段ベッドの下段、そしてベッド脇に置かれたクローゼットがある。となると、その残りが自分の使っていい部分なのだろう。

部屋の隅には段ボール箱が二箱、積み上げられている。見覚えのあるそれは、事前に哲平が寮へと送っておいた荷物だった。

段ボール箱を引き寄せて、哲平は早速荷解きを始めていった。それほど多くない荷物は、きつとすぐに片付いてしまう。そうしたら寮内を少し見回ろつと、荷物を出しながら哲平は考えていた。

予想通り、一時間もしないうちに荷物の片づけが終わってしまい、哲平は見取り図を手には部屋のドアを開けた。ここには知り合いは一人もいないので、当分は一人で時間を潰さないといけない。先に両隣の部屋に挨拶に行くべきか、と考えながら廊下へと出ると、目の前に突然現れた壁に哲平は額をぶつけてしまった。

視線の先には人の体があり、それが誰なのか確認しようと哲平は仰ぎ見る。首の傾ける角度が大きいほどに、何だか自分が惨めになつていく気がしてならない。

突然哲平にぶつかられたその男は、哲平を見下ろし、そして今しがた哲平が出てきたドアを見つめた。そしてもう一度哲平を見下ろす。

「もしかして、新しく入る編入生ってお前か？」

ポツリ、と男は言った。

「おう。俺は編入生だ。そういうお前は編入生じゃないな」

「ああ、俺は持ち上がり組みだ」

「へえ、何年？」

「一年だ」

「中学？」

「んなわけわるかつ」

男が声を荒げた。

哲平はからからと笑う。

「だよなー。いや、ここつて中学と高校が一緒だろ。だからもしかしてふけ顔なのかと」

「おいっ」

「冗談だつて」

哲平は男の腕を軽く叩く。

「ちよつとしたコミュニケーションのきっかけを作ろうかと思っただけだよ。ほら、俺つてここに知り合いがない編入生だから、最初のつかみは肝心だろ」

「・・・」

「俺、木ノ倉哲平。お前は？」

哲平に聞かれて、男は気を取り直したように哲平を見下ろした。

「本田宗司だ」

「よろしくな、宗司」

突然哲平に名前を呼ばれて、宗司は目を見張る。

哲平は基本的に人見知りというものを一切しない。直感的に第一印象の良い相手に対してはとことん馴れ馴れしくするタイプなのだ。

「今日から友達つてことで」

「あ・・・ああ」

「んでさ、友達ついでに教えてもらいたいことがあるんだけど」

言いながら、哲平は視線を周囲に走らせた。先ほどと同様、何だか怖い視線をそこらかしこから受けている気がしてならない。親の敵を見るようなその視線は、哲平にとってとにかく居心地が悪かった。理由も原因も分らないから余計に不気味だ。

宗司からはそういった視線を受けなかったので、哲平も聞きやすさを覚えたのだった。

「俺に向けられる痛い視線の理由とかつて、知らねーか？」

聞かれて、宗司は僅かに視線を周囲に流した。そして苦笑する。

その様子に、哲平は確信を持った。

「知ってるなら教えてくれ。なんか、すげーむかつくからどうにかしたいんだよな」

「説明できると思うが・・・ここだと、ちよつとな」

宗司は言いよどむ。そして、哲平が背にしている部屋のドアを見た。

「今って・・・その、ルームメイトはいるのか？」

「部屋に？いや、いないよ。俺が来たとき誰もいなかった」

「そうか。なら、部屋で話そう。入れてくれないか」

遠慮がちに宗司に言われて、哲平は快く部屋のドアを開けた。

少し緊張した様子の宗司だったが、哲平の言うように室内に誰もいないことを確認すると、ようやく肩から力を抜いて室内へと入っていった。

「で、何でだ？」

宗司と向かい合って座った哲平は、すぐに話を切り出した。待ちきれないといったその様子に、宗司は苦笑する。

「ええっと、説明するにはいろいろとあつてな。順番に言わせてくれ」

「おう。いいぞ」

偉そうに言う哲平に、宗司は気にした様子もなく自分の言葉を頭の中で整理していく事に集中していた。

「まず、ああいった敵意丸出しの視線はお前が原因じゃない。不可抗力というか、木ノ倉には全く非はないんだ」

「哲平でいいよ」

「あ、ああ。わかった。で、原因は木ノ・・・哲平のルームメイトなんだが」

「この部屋のもう一人か？」

「そう。会ったことは・・・ないよな？」

「ないな。俺今日来たばっかなんだぜ。来たとき誰も部屋にいなかったし」

「会えばすぐに分るんだが・・・その、ルームメイトっていうのが二葉真奈佳という奴で、うちの学園じゃかなりの有名人なんだよ」

「へえ」

「顔がとにかく可愛くて、女みたいでな。ここはほら、男子校だろ。しかも周りに何もないと田舎だし。女の子と知り合える機会なんて

殆どないから、おのずとそういう対象になっちまうんだ」

「・・・そういう？」

「アイドルとか、そういったことだ」

哲平はいまいち理解しきれないといった様子で顔をしかめた。

「そいつ、男だろ？」

「男だけど、可愛いんだよ。美少女って感じでな」

「でも男だろ」

「まあ、そうだけど。それでもいいっていう奴らも多いんだよ」

「・・・ホモか」

「いや、まあ、そこまでいく奴は少ないだろうけど。ようはアイドルの追っかけみたいな感じだな。ファンクラブもあるし。ストーリーマガいの取り巻きとかもいるし。とにかく、基本は誰も抜け駆けなし。勝手に話しかけたりするとファンクラブからリンチされるんだよ」

「なんだよ、それ」

「ばかばかしいといった様子で哲平は言った。宗司は苦笑するばかりだ。」

「実際に過去、二葉は何度も襲われそうになった事があるみたいだし、二葉を守るためにファンクラブが出来て規約とかが作られたんだ。皆のアイドルだから皆のもの、誰か一人が特別になるってのは許せない、ってのが今の現状だな。自分が守ってやっているみたいな自己満足が良いんじゃないのか」

「・・・はあ。でもさ、それと俺と何の関係があるんだよ」

「だから、お前のルームメイトが二葉なんだよ」

「だから？」

全く理解できないという哲平に、宗司は焦れたように言った。

「今まで二葉はずっと一人で部屋を使っていたんだ。何か間違いが起こつちゃいけないっていう上の判断らしい。だけど、お前が入ってきた。皆のアイドルと同じ部屋で寝るお前を、あいつらが認められるわけないだろ。出来るならここから追い出してしまいたいとか

考えてるんだよ、きつと」

「それってさ」

哲平は明らかに不服そうに眉間に皺を寄せる。

「俺、関係ないじゃん」

「だから、最初にそう言っただろ」

「うー」と哲平が唸る。

「好き好んでこの部屋になったわけじゃないのに！」

「・・・まあ、不運だよな」

同情するように宗司は言った。

「なあ、部屋って変えてもらえたり出来ないかな」

「無理だろ、空き部屋なんてないから。だから編入のお前がこの部屋にされたんだよ」

冷静に指摘されて、哲平は頭を抱える。

女みたいな男がアイドルで、ファンクラブがあつて、ストーカーがいる学校。宗司の言葉を反芻しながら、哲平は頭をかきむしった。

「なんつーところだよ。ありえねー」

「哲平」と宗司は哲平の動揺している姿を見ながら声を落として言った。

「俺は中等部の三年間をここで過ごしてきたが、だからこそお前にアドバイスできる事がある」

真剣な宗司の声に、哲平はごくりと唾を飲み込んだ。

室内に緊張が走る。

「有り得ないことが有り得ない。ここはそういう場所だ」

「・・・は？」

「つまり、ここに外の常識は通用しない。ここは別世界か異世界だとも思ったほうが良い。俺やお前に必要なのは平常心だ。どんなことがあつても自分を見失わない鋼の心だっ」

宗司は声に熱を込めて言った。

その姿に、哲平の心にはなぜか同情心が沸いてくる。

「お前、苦勞してきたんだな」

哲平は涙を拭うふりをした。そうしながら、目の前のこの男はやはり見た目通り良い奴なのだろうと哲平は感じていた。しょっぱなから友達になれそうな奴と知り合えた自分は、きつと幸運なのだろう。

「とにかく、この部屋にいただけでも悪目立ちするんだ。これ以上は止めたほうが懸命だな。なるべく二葉には近づかないほうがいい。間違っても好きになつたりすると、確実にここじゃ生きていけないぞ」

「んなこと言われてもなー」哲平は戸惑ったように言う。

「その二葉って奴、そんなに言うほどのもんなのか？」

「真奈姫って言われてほぼ全校生徒プラス先生たちにちやほやされるほどには可愛いな」

「・・・真奈姫、ねー。・・・ん？真奈姫？」

哲平は身を乗り出した。

「そんな風に呼ばれてるのか？」と聞けば、宗司は神妙な顔で頷く。哲平の頭の中では、数時間前に見た映像が巡っていく。

「今日ここに来る前に掲示板で新聞みたいなの見たんだよ。学校の校舎近くにある掲示板。そこに真奈姫の休日とかいうふざけた記事があつてさ」

「それが二葉だ。写真もあつただろ」

「ああ」哲平は道すがらに見た写真を思い浮かべた。

「確かに可愛いって感じだったな」

写真の中の美少女は、それだけでも心をときめかせるだけの魅力があつた。実際に動き喋るところを見たらさぞかし可愛いのだろう。だが。

「所詮は男だろ」

「そう言つて、二葉に魂売った奴がここにはごろごろいるんだよ」

宗司はため息をつく。

「二葉がここに入学した時は大変だったんだ。中等部も、高等部からも二葉の姿を見るために校舎に先輩たちが押し寄せてきたんだ。」

人気のないところに連れ込もうとしたり、勝手に奪い合いの喧嘩を始めて怪我人が出たりしてさ。それで治安維持もかねて、当時の高等部の生徒会が公認のファンクラブを結成したんだよ。規律を作つてある程度の牽制をかけたんだ。今じゃあ、二葉に勝手に話しかけることすらタブーになっている。クラスメイトであつてもな。当然、ルームメイトのお前もだ」

そう言う宗司の顔は、真剣そのものだった。

「近づく事すら出来ないアイドルが、突然沸いて出た編入生と同室で、しかも寝顔なんて見れるかもしれないなんて思えば、そりゃ殺意も生まれるだろうさ」

宗司の言葉に、哲平は表情を曇らせていった。

「なんか、その二葉つて奴も可哀想だな」

「え？」

「だって、勝手にいろいろと思われて、勝手に守られて、周り固められて、そんなんじや自分でダチを作る事も出来ないんだろうな。何をするにしても、そんなのは自分の勝手なのに」

「・・・そうだな」

宗司はまじまじと哲平を見た。本当に心からそう思つての言葉なのだろう。哲平の表情には上っ面の飾りが全く見られない。

（・・・良い奴だな）

宗司は今日始めて会つた哲平に対して、今までにもまして強い好感を得ていた。

すっかりと意気投合を果した哲平と宗司は、他に知り合いもないので二人仲良く夕食を共にした。食事は普通の家庭料理といった感じで、だが量だけはたくさんあるので哲平にとっては満足のいくものだった。

お腹一杯で食堂の椅子にもたれかかるように座っていると、不意に手元が暗くなった事に哲平は気が付いた。上体を逸らして顔を上向かせると、自分を見下ろす男と目があつた。哲平を見下ろすその男は、無造作に立っているようで、それでいてモデルのように品があり存在感を強く発していた。顔立ちが整っているからそう見えるのかもしれない。

(・・・んだ？こいつ)

哲平は見下ろしてくる男を睨み上げた。初めて会はずなのに、やはりこの男も自分に対して好意的ではなく、むしろ誰よりも敵意を剥き出しにしているように哲平には感じた。自然と、哲平にも男に対しての対抗心が芽生えてくる。

「おい」と男が低い声で言葉を掛けてきた。

ぴくりと、哲平の眉間が震える。だがすぐに「喧嘩はご法度」と思い出して、哲平は改めて振り返って男を見上げた。

大人になれ、と哲平は自分に言い聞かせる。

男は舐るように哲平の姿を上から下まで見てくる。そして。

「ちょっと面貸せ」

開口一番、喧嘩腰で男は命令してきた。

哲平の返事を聞く前に踵を返そうとして、哲平が立ち上がらないことに男は気付く。

「早く来い」と怒ったように男は言ったが、哲平はいつこうに立ち上がろうとはしなかった。冷めた目で男を見ながら、ふんつと鼻を鳴らす。

「あいにく、名乗りもしないような奴に貸す面は持ち合わせてないんでね」

（誰がついていくかつ、馬鹿者め！）

売られた喧嘩は気前よく買う主義の哲平だ。喧嘩を売ってきた奴が悪い、というのが哲平の持論なのだ。これで喧嘩になるうが相手が悪い。哲平の火のついた闘争心は揺るぎないものだった。

はつきりと対抗するように言ってきた哲平の言葉に、男は僅かに目を見張る。怪訝そうな顔で、なおも男は哲平を見下ろして呟いた。
「お前、俺を知らねーのか？」

「知るかよつ。俺は今日ここに来たばかりなんだ」

哲平の言葉を受けて、男は馬鹿にしたように目を細めた。それには哲平もかちんとくる。

立ち上がろうとしたところで、哲平は宗司に肩をつかまれた。宗司は力強く、腰を浮かせた哲平をイスに座り直させる。そつと、宗司は哲平に顔を寄せると耳打ちをした。

「生徒会の書記をしてる沢下心先輩だ。例のファンクラブの副会長」
宗司の言葉に、哲平は少し驚いた表情を浮かべた。

「多分、二葉のことで話があるんじゃないのか」

そう言われて、哲平は顔をしかめさせた。

「俺はないぞ」と言ったところで、目の前にいる男、心には通用しないのだろつ。

心の中には、ついて来ないという哲平の選択肢は存在すらしていないのだ。

「ここは素直に行つたほうが良いと思うぞ」

「・・・面倒くさい」

「なるべく騒ぎにならないようにしないとまずいつて。生徒会に目を付けられるのも厄介だしな」

「別に怖くなんてねーよ、そんなもん」

「他の学校のことは知らないけど、うちの学園で生徒会といったら、生徒の中での最高権力なんだよ。独裁と言ってもいい。それに媚び

へつらう奴らも多いから、生徒会を敵に回すって事は学園を敵に回すって事と同じなんだよ」

「それがなんぼのもんじゃい」

「問題を起こせば謹慎、停学、退学」

「うつ・・・」

「しかも教師は生徒会の味方だ」

「・・・」

「ここは一つ、お前が大人になれって」

「・・・はあ」

宗司に諭されて、哲平はようやく重い腰を上げた。

心はようやく自分に従うように立ち上がった哲平に対して嘲るような笑みを浮かべ、踵を返す。

哲平が付いてくるかどうかも確認することなく、心は早足で歩いていった。

どうにも、この人間は相手に歩調を合わせるといいうことを知らないらしい。

「思いやりって言葉は何処に消えちまったんだ」

そうぼやきながら、哲平は仕方なくといった様子で心の後に続いて行った。その後を宗司が付いてくる。

「お前って良い奴だよな」

何も言わなくても付いてきてくれた宗司に対して、哲平は顔を綻ばせた。

「・・・放っておくと、お前の場合何をしでかすのか分ったもんじやないからな」

先ほどの食堂での哲平の好戦的な態度に、宗司は一抹の不安を抱えていた。哲平が見かけよりもだいぶ気が短いらしいことに気がついたのだ。それに二葉真奈佳の話は、今日来たばかりの哲平には酷だろうと宗司なりに気をきかせたのだった。

無言で歩く心の後続き、二人が通されたのは寮内にある一室だ

った。ドアの横には「月島楓」「河内佐奈留」という名前が掲げられてる。それを見て、宗司は部屋に入る事を躊躇う素振りを見せた。哲平は宗司の横にいて、宗司の動揺にすぐに気付く。

「どうした？」

「いや・・・ここ、生徒会副会長の部屋だ」

「へえ」

「ファンクラブの会長でもある」

「へえ・・・はあ!？」

「・・・こんなに早く出てくるなんて・・・よっぽど哲平を警戒してるんだな」

宗司の神妙な声に、哲平はうんざりとした様子で肩を落とした。本当に余計な警戒だと思えて仕方がない。

「さっさと入れ」という慥然とした心の命令口調に、哲平と宗司はようやく室内へと足を踏み入れた。

室内に入った心は無言で壁際に立った。部屋に入ってくる哲平を睨みつけてくる。

哲平はドアの閉まる音を聞きながら、ゆっくりと室内を見回した。哲平と宗司、心の他に、哲平が来るのを待ち構えていたように二人の人影があつた。

一人は端正な顔立ちの男前がベッドの縁に座っている。その横には校内新聞の写真で見た美少女・・・ではなく少年が寄り添うようにして座っていた。皆が皆、室内に入ってきた哲平を注目している。哲平は居心地の悪さを感じながらも、宗司の横で周囲を威嚇するように胸を張り仁王立ちしていた。

「なあ、あれ誰だ？」と哲平は宗司に耳打ちした。

哲平はベッドに腰掛ける多分長身の男に視線を流す。哲平の視線を追うように宗司もその男をちらりと見た。

宗司は声を潜めて、哲平に耳打ちする。

「ベッドに座っているのが生徒会副会長の月島先輩だ。その隣りが

お前のルームメイトの二葉」

「てめーが押しかけてきたんだ。俺たちはルームメイトなんて認めてねー！」

宗司の声を聞きつけた心がすかさず反論を示す。

「・・・だそうだ」と否定する気のない宗司が哲平を見た。その目が「それで納得しろ」と物語っている。そしてなるべくおとなしくしているという宗司の切望が哲平にも伝わった。

「河内先輩はいないみたいだな」

宗司がほつと息を吐く。

「誰？」

「この部屋のもう一人の先輩だ。生徒会の会計をしている」

「ってことは、ファンクラブ会員か？」

「いや、河内先輩は違うと思うけど」

宗司の言葉は歯切れが悪かった。

なるほど、と哲平は思った。その河内という先輩も含めてここにいる生徒会の役員は警戒する必要がある者ばかりという訳か。

「おい」と声を掛けられて、哲平はベッドに座る男、楓を見た。楓は先ほどから射るような冷たい視線を哲平に向けてきていた。心とは違い好戦的ではないが、友好的とは冗談でもない視線だ。むしろ、何を考えているのかが分りにくい分、不気味ですらある。

「真奈は一応お前と同室ということになっているが、しばらくは部屋に帰さないからそのつもりでいろ」

楓は無言を言わさぬ迫力で言い切った。

どんなつもりだよ、と哲平は内心で呆れてしまう。帰る帰らないは本人の勝手だろうと思うのだが、そこはあえて言わずにおいた。我慢し譲歩する自分は大人だなと哲平は密かに自画自賛する。

「じゃあ、点呼とかはどうするんですか？」

一応相手は先輩なので哲平は敬語を使って聞いてみた。入寮の際に渡された案内には毎日消灯前に点呼があると書かれていたのだ。

「上に話は通してある。お前が気にする必要はない」

冷たく突き放すような楓の言葉に、哲平は「あ、そう」と受け答えるしか反応を示せなかった。

そこで会話は途切れ、そろそろ帰ってもいいだろうかと思平は考える。こんな居心地の悪い場所にはもういたくはない。哲平は宗司を見上げた。

「もういいよな」と哲平は宗司に小声で聞く。哲平を見下ろしてきた宗司の目も、早くこの部屋から出たいと語っていた。

そんな哲平と宗司の様子を前に、「お前・・・」と楓がボソリと言った。

この部屋に来て一度真奈佳の姿を見ただけで興味を示すそぶりを見せない哲平に、楓は不信感を募らせていた。

「真奈を見てどう思う？」

つい、楓は余計なことだと思いつつも聞いてしまった。だがそれは確認しておかなければならない重要事項であることは確かなのだ。もし真奈佳に対して少しでも好意を寄せようものなら、すぐにもこの寮から追い出してやると楓は決めていたのだ。そして、真奈佳に対して絶対にそういった不純な気持ちを誰もが持つものだと楓は確信に近い思いを持っていたのだ。

聞かれた哲平はいえ、きょとした顔で楓を見た。

どう、とはどういうことなのだ？

質問の意味が分らずに、とりあえず真奈佳を見た感想でも言えればいいのかと思いつく。それならばと、哲平は改めて真奈佳を見た。

途端に、心から「じろじろ見るんじゃないよ！」という罵倒を投げ付けられた。

相性が良いのか悪いのか、心の発言は哲平の闘争心に火をつけてしまうようだ。

「初対面でどう思うかと聞かれたら、とりあえずどんな奴か見るのが普通だろうがっ」

哲平は心を睨みつける。哲平の中で、心が先輩だという認識は全

くないようだ。

心は壁から背中を離すと、一步、足を踏み出した。

「なんだと！？てめー、先輩に向かってどんな口聞いてんだ、こらっ」

「はっ。俺は歳で相手を敬うことはしない主義なんだよ。1年2年早く生まれたからって威張るんじゃないよ！」

「てめえ！？」

「なんだよ！喧嘩なら買ってやるぞっ」

鼻息荒く、哲平と心はにらみ合う。一触即発、である。

「止めて、心先輩」

不意に、男にしては少し高いキーの声が二人の間をさえぎった。見ると、真奈佳が不安そうな顔で心と哲平を交互に見つめている。

すぐる様に真奈佳に言われて、心はすぐに一步引いた。壁に背中をつけて、だが視線は哲平に定めたまま睨みつけてくる。顔には不本意だと大きく書かれているが、それでも心は真奈佳のお願いを無視することは出来ないようだ。

「哲平」と横にいる宗司に名前を呼ばれて、哲平は熱した頭を冷やしていった。深く息を吐き、気持ちを落ち着かせていく。

「質問に答えろ」と楓に言われて、哲平は話が振り出しに戻った事にうんざりした。

「・・・会ったばかりで何を思えって言うんすか」

哲平は本心を隠すことなくそう言った。だが、楓は納得していない表情で哲平を見据えてくる。何かを答えなければ、楓は自分を開放してくれないのだろう。本当に面倒なことに巻き込まれてしまった。哲平はため息を吐き出しながら喉の奥から声を絞り出す。

「まあ・・・正直に言ってもいいのなら、言いますけど」

哲平はじろりと真奈佳を見た。全ての元凶がこの美少女のような少年、真奈佳にあるのだと思うと、どうしても見る目付きがきつくなってしまう。真奈佳は哲平の強い視線に怯えるようにして、楓の

腕にしがみついた。その姿は本当にか弱い少女のようで、保護欲を誘うものだった。男なのに、男には全く見えない。

(・・・ああ、俺、こいつを)

「どつきてー」

真奈佳を見つめたまま、哲平はぼそりと呟いた。

哲平の言葉に、周囲の空気が凍りつく。だが、哲平はそんな事には全く気付かなかった。ようやく自分の納得できる感想を得られた事に勢いづいたのか、ふつふつとわきあがる感情をそのまま声に出していく。

「何ていうか、マジでムカつく。何なんだ？それ。お前本当に男か！？顔なんてもんはどうだっていいんだよ。男っばかろうが女っばかろうが、もって生まれたもんだし親から授かったもんだしな。整形しろとか言うつもりは一切ねーけどよ。だって、それも個性の一つだろ。けどな、男に生まれたからには気張ってなんぼだろうがつ。守られることが当たり前みたいなその態度が俺は気に食わない！女じゃないんだから。別にな、体が男でも心は女だって言うんならそれでもいいんだよ。でもお前は男だろ。男なら大切なもんを守るために戦えよつ。拳でのし上がれよ！それが男ってもんだらうが！」

哲平は拳を握り、熱弁した。我ながらなんと男気溢れる主張なんだ、と自分に酔いしれていく。

「・・・お前」と楓は呆氣に取られた様子で哲平を見遣った。

「真奈を見てなんとも思わないのか？」

信じられない、といった様子で楓が言った。

「だから、いろいろと思ってるじゃないっすか。しな垂れるとか、膝をつけて座るとか、馬鹿みたいに目を潤ませれば良いわけじゃないとか」

「そうじゃないっ。可愛いとは思わないのかと、聞いているんだ」
焦れたように楓が言う。哲平は「ああ、そういうことか」とようやく楓の質問の意味を察した。

「まあ、可愛い顔はしていると思いますけどね。そんなこと、たいした事じゃないでしょう」

事も無げに哲平は言い切った。

「いいですか、男つてのは顔じゃないですよ！ハートです！心意気！中身で勝負してこそ男つてもんでしょう！」

「はっ」と、心が鼻で笑う。

「モテない奴ほど、そう言うんだよな」

心底馬鹿にしたような心の言葉に、哲平はじろりと睨みつけた。心はなおも言いつのる。

「そういうのを負け犬の遠吠えって言っただよ」

「んだと！？」

「でもつて、モテない奴つてのは、女も顔じゃないとかぬかすんだよな。そりゃ美人には縁がないからそう言わざるを得ないんだろっけどな」

くくつと、心が笑った。

「顔だけで人を判断するような奴は、最低だと俺は思っけどな」

負けじと哲平が心に噛み付く。それを心は余裕の笑みで受けて立つ。

「第一印象なんてものは、まず外見だろ。男も女も、見た目の良い奴に擦り寄っていくんだよ」

「そんなのは最初だけだ」

「だが、きっかけすら掴めないようなお前らには、その次の付き合いも縁がないだろ」

「お前みたいな歪んだ価値観を持った奴こそ、その次の付き合いなんて無理だろうな」

「知ったような口を利くな」

「知らねーよ、お前のことなんて」

哲平と心が睨み合う。

「きれい事並べたって、結局お前も顔で相手を選ぶんだよ。人間なんてそんなもんだ」

心は吐き捨てるように言った。

「俺は違う」

哲平はきっぱりと言う。

「どうだか」と心は乾いた笑いを漏らした。

「俺は」と哲平が静かに言った。その目はとても真剣で、思わず心も言葉を詰まらせる。

「付き合う奴を顔で選んだ事なんて一度もない。そいつがどういう奴かちゃんと自分で確かめて、選ぶんだ。上辺だけの付き合いなんていらない。顔で選んで隣に並んで、それでいいなんておかしいだろ。そんなの、身につける装飾品と同じだ。そんなのはダチでも何でもない。女だって同じだ。顔じゃない」

哲平は拳を握る。

「女は・・・」

哲平は言葉を切った。

一瞬の静寂。

室内にいた誰もが、息を飲み、哲平の次の言葉を待った。

「女は巨乳が一番だ!!」

哲平は声高々に、自信に満ち溢れたように言い切った。

「・・・はあ!？」

心はぽかんと口を開けたまま哲平を凝視する。哲平以外の誰もが、言葉を忘れたようにただ哲平を凝視していた。

「腰のくびれとたつぷりと弾力のある胸。これぞ男の浪漫だよな!」

「・・・おい」

「童顔に巨乳もエロくて良いけど、やっぱりきりつとした少しきつめの目元に巨乳が一番良い!」

「おいっ」

「小。A子最高お!あの体のラインは芸術だー!」

「てめー!人の話を・・・」

「あっ」

興奮気味だった哲平が、突然大人しくなった。心は訝しげな視線を向ける。

哲平は俯き、その場に固まっている。

何事だと、皆が哲平に注目していた。

「・・・チンコだった」

ぼそりと、哲平が呟いた。

「・・・さ、最低！」

突然、真奈佳が叫んだ。その顔は真っ赤に染まっている。

「信じられない！そんな・・・下品なこと」

肩を震わせながら、真奈佳が言った。

「真奈、こういう輩には近づいてはいけないよ」

楓は哲平を汚いものでも見るような目で睨み、真奈佳の肩を抱き寄せた。

「お前、最低だな」と心が呆れたように言う。楓とは違い、そこに軽蔑の色はないので、同じ男として分らないわけではないようだ。

哲平は、周囲の反応にそれこそ信じられないといったように目を見張った。

「何言ってるんだ！これは健全な日本男児として当然の反応だぞ！男に組み込まれた遺伝子がそうさせてるんだ！あの胸でなんてたたねーんだよ！それこそ異常だろうが！」

「たつか！つつか、それ以上言うな！真奈の前だぞ！」

「こいつだって男だろ！俺たちと同じじゃねーか！」

哲平は真奈佳を指差して叫んだ。

「ふざけんな！真奈をお前みたいなクソ馬鹿と同じにするんじゃないよ！」

心が叫ぶ。

「つっ―より、何だよ、お前。さんざん偉そうなこと言って、結局

外見で判断するんじゃないか！」

「何がだよ」

「何が中身だよ。巨乳がいいとか言ってる時点で、てめーは女を外見で選んでるんだろっ」

「ばっか！ただの巨乳じゃねーぞ。全体のバランスだって大事なんだ。こっ、山と谷が絶妙のバランスで・・・」

言いながら、哲平は両手で身体のラインを宙に描いていく。

「はー、やっぱりいいよなー、夢だよ、ドリーム！あそこには男の浪漫が詰まってるんだ」

うつとりと、哲平が呟いた。

「んなことはどーだっていいんだよ！胸なんてでかかろーがなんだろうがな。俺はお前の頭の中が信じられねーよ」

心は苛立ちを隠そうともせずに苦々しく言い放った。

ぴくり、と哲平の眉が上がる。そろりと心を見て、哲平は一つのことをひらめいた。

一人で納得するように頷くと、窺うような視線を心に向ける。

「お前、もしかして貧乳派か」

そういうことが、と哲平は納得する。言われた心は、目を丸くするばかりだ。

「はあ！？」

「うんうん、人の好みはそれぞれだもんな。悪い、俺の好みをお前に押し付けるべきじゃなかったよな。貧乳だって見れば味があつていいもんじゃねーか。恥ずかしがることはないぞ」

哲平は心を安心させるように笑みを浮かべて見せた。

「・・・だから」

心はこめかみに血管を浮かべながら奥歯を噛み締める。握った拳は、遠目でも分かるほどに震えていた。

「お前と一緒にするんじゃないー！」

気が付けば心に部屋を追い出された哲平と宗司は、二人肩を並べ

て自室へと戻っていた。道すがら、哲平はやれやれといった様子で肩をすくめる。

「あいつら、短気だよな」

真剣に哲平は言った。そこに来て、堪えきれないといったように宗司は声を立てて笑い出した。肩を震わせるその様子は、今まで必死に我慢してきたのだということを容易に示している。

「哲平。お前マジで良いよ。最高！」

宗司は哲平の肩を乱暴に叩いた。

「宗司も巨乳派か？」

「いや、俺はどっちかっていうと、その中間くらいが好きだな」

「そっかー。それも好みだもんな」

哲平はへらりと笑う。

「なあ、哲平は本当に二葉を見てなんとも思わないのか？」

「なんだよ、お前まで」

「だって、正直あれだけ可愛いのは、実際の女の子の中にもそうはいないだろう」

「あー、確かにな」

哲平は素直に頷いた。

「あれが女だったら惚れてるかもしれないな。貧乳だけど」

「そこかよ」

「いや、そこは重要でしょう。・・・つてのは冗談で」

「冗談なのかよ」

「まあまあ。問題なのは、だ。二葉が男か女かってことだ。体がじやねーぞ、中身がだぞ。あいつは女みたいに見えるけど中身は男だろ。女っぽく振舞っていてもな、あいつは男なんだよ。なら、俺は同じ男として接するべきだと思うわけだ。ダチとしてでもなんでもさ、付き合う以上はそいつの人間性つてのをちゃんと見ないといけないと思うんだよ。面なんてもんは、人間にとってはただの付属品だろ。それに左右されていたらいつまでたっても腹割って話なんて出来ないじゃん。そんなのもったいないねーし、つまらねーだろ」

哲平の言葉に、ややあと宗司が口を開く。

「お前って、カッコイイな」

「おお！？マジで？」

「マジマジ。俺、お前と知り合えて嬉しいよ」

宗司の言葉に、哲平は喉を振るわせた。

「宗司っ」

「哲平っ」

二人は力いっぱい抱きしめあう。

そのまま数秒、周囲の怪しげな視線に気付いて、哲平と相思はゆっくりとお互いの身体を離していった。ここが廊下だということをようやく思い出したのだ。ふざけ合うにしてもここまでが限界だ。

「・・・戻るか」ポツリと哲平が言う。

「そうだな」宗司も頷いて、二人は肩を並べてそそくさと自室へと戻っていった。

ルームメイトのお姫様 04

チャラリララ〜。

軽快な機械音の奏でる音楽に、哲平は布団の中でもぞりと動いた。うつすらと目を開けながら、手を伸ばす。何度かその手が宙を彷徨い、哲平はようやく音を奏で続ける携帯電話をつかみ取ることに成功した。もぞりと、哲平は布団の中から頭を出す。

哲平の手の中にあるちかちかと光るそれは、朝の7時を知らせている。昨日、寝る前に哲平が自分でセットしたアラーム音だ。

（・・・もう朝か）

哲平は鈍い頭をふらふらと上げながら、慣れた手つきでアラームを切った。

右に左に視線を彷徨わせ、ようやく自分が寮の自室にいるのだと自覚した。

哲平が入寮して初めての朝だ。

（朝飯は・・・）

「8時までだよなー」

一度身体を伸ばすように状態をそらせて、哲平はもそもそと布団から這い出ていった。

二段ベッドの上段に眠っていた哲平は、そろりとベッドの淵に取り付けられたはしごを下りていく。

床に足をつけ、もう一度身体を伸ばし、ようやく哲平は室内に自分以外の人影があることに気がついた。それはベッドの下の段の縁に腰掛ている。

「あれ？」とまだぼんやりとしている視界に目を凝らすようにしながら、哲平は怪訝そうに顔をしかめた。

「お前、当分帰ってこないと言ってたか？」

そう声を掛けると、室内にいた人物、真奈佳がもじもじと身体を

揺らしながら、遠慮がちに哲平を見上げてきた。

「うん・・・そのつもり、だったんだけど」

真奈佳はちらちらと、哲平を見上げては俯く。言葉を濁しながら、物言いたげな視線を投げかけてきた。

朝からそんな意味不明な姿を見せられた哲平は、途端に不機嫌になつていった。別に真奈佳はルームメイトなので同じ部屋にいることは全く構わないのだ。なのだが。

「言いたいことがあるならはつきり言え！俺は朝はテンションが低いんだよ！めちゃくちゃだるいんだっ」

哲平は誰が見てもテンション高めの声を張り上げる。

きつぱりと、冷たく言い放たれた真奈佳は、気後れしたように俯いてしまった。そのままじっと動かない。

（・・・たく、朝は何も考えたくないのに）

哲平は寝癖の目立つ頭を掻いた。面倒だと思いつつも、どうにかした方が良さだろうと考えを巡らしていく。仮にも真奈佳はルームメイトなのだ。これから三年間は同じ部屋で過ごす事になるのだ。たとえ当分の間この部屋に帰ってこないとしても、どこかで顔を会わせる機会はあるだろうし、その頻度は普通の同じ学校の生徒というだけよりも高いはずだ。できれば気まずい雰囲気は作りたくはない。なるべくなら仲良くしていきたい。

哲平は真奈佳の前にしゃがみ込んだ。見下ろされるといふことはそれだけで相手から威圧された感じを受けることを哲平は身をもって知っているからだ。普段見下ろされる事が多い哲平からしたら、ちゃんと話をする時くらいは視線を合わせるとよく思っていた。なにぶん、相手の方が背が高いので必然的に哲平は見上げる形となり、それが大層気分の悪い事なのだ。

「なあ、俺に何か言いたいことがあるのか？あるなら何でもいいから言えよ。俺はわりと気が長いほうだから、ちゃんとお前の言い分も聞いてやるからさ」

意識して少しだけ声を和らげて哲平が言った。

「・・・あのね」と、真奈佳がゆつくりと顔を上げる。

哲平の目をじっと見つめる真奈佳は、意を決したように口を開いた。

「朝ごはん、一緒に食べようと思って」

「・・・は？」

「だから、哲平と一緒に朝ごはんが食べたくて、帰ってきたんだ」
「・・・あ、そう」

哲平は拍子抜けだ。もつと何か言われるのかと思っていた。昨日はつい頭が熱くなってしまう、自分の主張を盛大に披露してしまったのだから、そこに何か思うところでもあったのかもしれないとわずかな心配をしていたのだ。だが、それは取り越し苦労のようだった。

真奈佳は真剣な顔つきで哲平を見つめる。そこに嘘は見られない。本当にそれだけなのだろうと、哲平は感じた。

可愛らしい顔を不安げに曇らせながら、真奈佳は哲平の返事を待っていた。それが家に置いていかれる子犬のようにすがりつくような表情で、哲平は邪険に払う事が出来なくなってしまった。別に朝食くらい一緒に食べても良いし、むしろこれからのこともあるからそれなりに交流を深めた方が良いのかもしれない。同じ屋根の下に暮らし同じ釜の飯を食べるということは、兄弟同然と言ってもいいくらいなのだ。そして、きちんと話をすれば真奈佳のいいところも分るだろうし、友達にもなれるかもしれないのだ。

「んじゃ、行くか」

哲平はゆつくりと立ち上がった。

「着替えるから少し待ってるよ」

言い終えて、哲平はちらりと視線を向けた。座り込んだままの真奈佳は、ぱつと花が咲いたような笑みを浮かべて哲平を見上げてくる。その笑顔は、ブラウン管の中で笑顔を振りまくどのアイドルの女の子たちよりも可愛らしいものだった。

（・・・ほんと、詐偽だよなー）

哲平は真奈佳の笑みを見下ろしながら、しみじみと思う。これだと騙される輩がいても当然だ。もっとも、哲平とすると真奈佳が男だと分っている時点で、どれだけ可愛い顔立ちをしていようが女の子に対するような対応に変える気など微塵もない。

哲平はクローゼットを開けると、中からジーンズとＴシャツを取り出した。入寮して二日目で、寝巻きで外をうろつく気にはとてまなれない。それくらいのＰＴＯはわきまえている哲平だった。

着替え終わるとそのまま哲平は部屋の外へと出て行く。その後を追う様に、真奈佳も哲平の開けたドアを潜り抜け、部屋の外へと出て行った。

ざわりと、周囲が騒ぎ出す。

部屋から出てきた真奈佳の姿を見た生徒たちが、途端に騒ぎ出したのだ。そして、真奈佳の隣りに立つ哲平を見て、剣呑な視線を投げかけてくる。

その突き刺さるような視線に、哲平は一晩寝て忘れてしまったたここでの自分の立場というものを思い出した。昨日も感じた居心地の悪さが哲平を襲っていた。面と向かって喧嘩を売られるほうがずっと気が楽だ。ただ遠巻きに敵意を向けられているだけだと、いちいち相手にするのも馬鹿らしい。かといって、無視するには向けられた視線は強すぎる。

(・・・なんで俺がこんな目に・・・)

哲平は急激に感じる重荷に、そつとため息を落とした。

ご機嫌な様子で食堂へ向かおうとする真奈佳を押しとどめ、哲平は宗司の部屋の前に立つ。宗司はすでに朝食を食べているかもしれない。それでも一応、といったように哲平は力いっぱい部屋のドアをノックした。

出て来いっ、と念じながら何度かドアを叩き続けていると、ようやくガチャリと音を立ててドアが開かれる。

開いたドアの隙間から、宗司が顔を覗かせた。

正面に立つ哲平を見やり、「何だよ、朝っぱらから」と少し不機嫌そうな声を投げかけてきた。

「朝飯、食ったか？」と哲平が聞くと、「これからだけど・・・」と返事が返ってくる。そうしてドアが完全に開かれて、宗司が姿を現した。すぐに哲平の横に立つ真奈佳に気付いた宗司は、途端にその表情を曇らせた。目で「自分を巻き込むな」と哲平に訴えかけてくる。宗司の気持ちを察しながらも、哲平は引く気は一切無かった。

「朝飯、一緒に行こうぜ！」

哲平は宗司が逃げられないように腕を掴んだ。右足を差し入れて開いたドアを固定する。宗司は嫌そうに顔を歪ませていた。

「・・・俺は遠慮する」

すでに周囲に群がり始めた寮生たちから痛いほど陰を含んだ視線を送られているのだ。この上仲良く食堂で食事をしようものなら、後どんな仕打ちを受ける羽目になるのか考える事すら恐ろしい。だがそれは哲平も同じで、何より自分だけが巻き込まれることが面白くないのだ。

「そんなこと言うなよ」と哲平はにこやかな笑みを浮かべながら言った。掴んだ手に力を込め、「逃がさんぞつ」と目で訴える。

二人は身を寄せ合うようにして声を潜めて囁きあった。

「俺を巻き込むなよ」

「俺だって巻き込まれてるんだ」

「なら回避すればいいだろう」

「出来なかったんだよ。一応ルームメイトだし」

「だから、ルームメイト同士仲良く二人で行けよ。そして親睦でも深めろよ」

「俺一人でこんな針の筵に飛び込めって言うのか!？」

「俺は飛び込みたくはない」

「俺だって嫌なんだよ」

「だったら・・・」

「だけど、それは別に二葉のせいともいえないことだろ」

「・・・それは、まあ、そうだが」

「というわけで、一緒に行こう！」

「いや、意味が分らんし」

「俺一人じゃ、怖いじゃん」

「お前なら十分乗り切れるだろ」

「俺たち友達だろ」

「・・・昨日まではな」

「宗司いー」

哲平は宗司の腕にしがみついた。

「一緒に行ってくれよ！正直、俺一人じゃ荷が重いんだよ。こんな鬱陶しい視線を向けられ続けたら、温厚な俺でもさすがに切れそうだし。入寮二日目で暴れるわけにはいかないだろ」

哲平に拝むように頭を下げられて、宗司は諦めたように深く息を吐いた。

ルームメイトのお姫様 05

第一寮棟の食堂は建物の二階にある。

一度に全員が収容できるわけではないが、それなりに広い食堂にはすでに多くの寮生達が食事をするために集まっていた。

いつも騒がしい食堂だが、今日ばかりはとても静かだった。静かすぎると言ってもいい。

哲平と宗司、真奈佳が連れ立って表れた時に、騒がしかった食堂は一気に静寂に満たされた。その後からは何事かを囁きあう声がそこかしこで聞こえてくる。そのどれもが哲平と宗司に対して友好的ではないものだ。

朝食を受け取り席に着き、食べ始めてからも周囲の様子は変わることはなかった。

そこに変化が訪れたのは、生徒会副会長であり真奈佳ファンクラブの会長でもある楓が姿を現したときだ。羨望の眼差しが楓へと向けられて、その視線は楓が動くたびにその姿を追う様にして動いていく。

食堂へと表れた楓は、すぐに真奈佳の姿を見つけて真っ直ぐに向かってきた。その後ろには心もいる。楓と心は、食事をする三人の傍らに立つと怒気のみなざる目で哲平を見下ろした。だが、真奈佳を見る目だけは相変わらず優しいものだ。

楓は無言で真奈佳の横に座る。真奈佳の正面には哲平が座っており、哲平の左隣には宗司が座っている。そして哲平の一席空けた右隣にどかりと心が腰を下ろした。

楓と心が放つ険悪な雰囲気、周囲は水を打ったように静まり返る。固唾を飲んで、周囲の寮生たちはことの成り行きを見守っていた。

哲平は特に楓と心の出現を気に留めることなく、自分のペースを崩さずに箸を勧めていく。われ関せずといった様子だ。動じる事も

ない図太いその神経に、宗司は恨みがましい視線を哲平へと送った。やはり自分がいなくても平気じゃないか、と文句を言っていてやりたいが、それを口に出して言えるような雰囲気ではまったくない。宗司は食事も喉に通らないようで、箸を握り締めたままちらちらと楓と心の様子を伺っていた。

「真奈」と楓が真奈佳を見つめて声を掛けた。

「どうして一人で部屋に戻ったんだ？」

優しい声で問いかける。決して責めているわけではなく、戸惑っているといった声音だった。

「だって」と真奈佳は歯切れの悪い声を出す。楓に断りを入れなかったことには少しの後ろめたさがあるのだろう。

「僕・・・一晩よく考えたんだけど」

ポソポソと真奈佳は呟くように言った。楓は静かに真奈佳の声に耳を傾けている。

「僕ね、哲平と友達になりたいんだ」

そう言って、真奈佳は哲平を見た。

「哲平となら、友達になれるって思ったんだ。だって、哲平だけは僕を普通に扱ってくれるから」

真奈佳は嬉しそうにはにかんだ笑みを浮かべる。話題の主である哲平は、自分の名前が出たことで箸を止めた。真奈佳と目が合い、真っ直ぐの笑みを向けられて口元を引きつらせた。

周囲からの視線はいつそう険しくなり、射殺さんばかりのその視線に哲平はぐくりと唾を飲み込んでいく。

隣りに座る宗司に身体を傾けて、哲平はそつと宗司に囁いた。

「なあ、これってさ・・・新手の嫌がらせか？」

「二葉にそんなつもりがあるとは思えないけど・・・かなりきついよな、この状況は」

宗司も周囲に視線を走らせながら、真面目に受け答えてた。哲平と違い大きな身体をちぎ込ませるようにしている。

身を寄せ合うようにした哲平と宗司の姿を見て、真奈佳は口元を

引き結んだ。

「哲平と本田君って、仲良いよね」

真奈佳の拗ねたような声が、周囲の怒りを一気に沸騰させていく。

「なんだ！？あいつ！」

「真奈姫に近づくんじゃねーよ！」

「新入りだろ？でかい面しやがって」

「ただで済むと思ってるのか！？」

「なんだ、あの顔。たいして良くもないくせに、真奈姫の隣りにいていいと思ってるのか？」

「身の程を知れよ」

「自分がカッコイイとか思ってるんじゃねーの？アホだろ」

「汚い姿を真奈姫に見せるんじゃねーよ」

「俺の真奈姫が汚れるじゃねーか！」

「消えろ。いなくなれ！」

唐突に湧き上がる罵声に、だが哲平は聞こえないふりを決め込んだ。ただ言っているだけなら害はない。相手にするだけ無駄だし、数が多いだけに全てを打ち負かすことは容易ではない。はつきり言っただけの無駄だ。熱くなっただけで対抗しても、労力の無駄で自分だけが馬鹿を見るだろう事を哲平は冷静に分っていた。

（勝手に言ってる）

心の中では毒づきながらも、哲平は平静を装っていく。

「チビのくせに」

ガタンッ。

不意に耳に飛び込んできた言葉に、哲平は勢いよく立ち上がった。その顔は先ほどまでの冷静さは全くなく、興奮したように目がきら

っている。

突然の哲平の変貌に宗司は驚いたように目を見張り、身体を引かせた。だが、周囲に視線を走らせて飛び出さんばかりの哲平に、宗司は慌てたように哲平の腕を掴んだ。

哲平はすでに声のした方を探り当て、そこへ飛びつこうとしている。

「あいつらの言う事なんて放っておけよっ」

宗司は哲平の腕を掴む手に力を込めた。

「離せ！俺は・・・俺は！」

哲平は宗司の手を振り解こうともがく。だが、哲平と宗司との体格差は歴然で、哲平は宗司の手を振りほどくことが出来なかった。

「俺はチビって言われるのが一番嫌いだ！」

哲平が叫ぶ。その言葉が哲平の地雷なのだろうと宗司は理解した。だからといって腕を掴む手を離すわけにはいかない。離せばすぐにも哲平は飛び出してしまっだろう。そして地雷を踏んだ者へ殴りかかるだろうことは宗司にも容易に想像できる。

「チビじゃねーか」

側で様子を見ていた心が、嘲笑うようにして言った。

その瞬間、哲平はもがく身体をぴたりと止めて横にいる心を睨みつけた。燃えるような視線を心へと向ける。

哲平は何も言わず、今度は心に飛び掛る。だがその寸前で宗司が哲平を羽交い絞めにした。

「離せー！」

力の限り暴れる哲平を、宗司は体全体で押さえ込んでいく。

「落ち着け、哲平っ」

こんなところで生徒会役員の心を殴られては、後のフォローなど出来やしない。ただでさえ危うい立場に立たされているのだ。これ以上の揉め事はどうしたって避けたかった。それもすでに手遅れかもしれないという思いは、とりあえず気付かないふりをする。

「哲平！」

宗司にもう一度強く名前を呼ばれて、ようやく哲平が大人しくなった。宗司の腕の中で、それでも耐え切れないといったように握り締めた拳を震わせている。

「俺は・・・」

搾り出すような哲平の声。

顔を上げて、哲平は心を力の限り睨みつけた。

「好きでチビやってるわけじゃねーんだよ！これは絶対に遺伝なんだ！牛乳飲んでも背が伸びなかったんだよ！身長伸びる君を使っても成果がなかったんだよ！悪いか、くそっ」

捲くし立てるようにして叫んだ哲平は、呼吸を乱し、荒く肩で息をする。

言われた心は、よく分らない単語に眉を寄せている。

「・・・何なんだ？身長伸びる君って」

「何だよ、知らねーのかよ」

哲平は馬鹿にするように目で笑った。

「身長伸びる君ってのはな、身長を伸ばす機械のことだ。すげーんだぞ、本当に身長が伸びるんだっ」

威張るような哲平の姿に、心はなおも眉間に皺を寄せたままだ。

「さつき、お前伸びなかったって言ってたじゃねーか」

心の言葉に、哲平はびくりと身体を揺らし、そして打ちひしがれるように体から力が抜けていった。慌てたように宗司が哲平の身体を支え、哲平を椅子へと座らせていく。

「1？伸びたんだぞ！でも・・・あと10？欲しかったのにー！」

哲平は叫ぶと、テーブルに突っ伏した。

「俺にあと10？身長があれば、ゆかりちゃんを彼女に出来たんだ！それなのにつ」

「誰だよ、ゆかりちゃんって」

「知らねーのか！？ゆかりちゃんを！」

「知るわけがねーだろうが！」

顔を上げ、やはり馬鹿にしたような哲平の言葉に、耐え切れずに

心が叫んだ。息を乱したことを恥じるように咳払いをして、心は自分を落ち着かせていく。ここは冷静に、と何度か自分に言い聞かせて、改めて心は哲平に話しかける。

「で？お前はそのゆかりちゃんって子に振られたのか」

名前からして、相手は女の子だろう。片思いで終わっただろう。哲平の恋に、多少の同情も生まれてくる。自分よりも背が低いからと言う理由だけで振られたのであれば、それは男として惨めなものだろう。

「俺に身長がないばかりに・・・」

哲平は悲壮感を漂わせながら呟いた。

「お前、身長いくつなんだよ」

心は聞いてみる。哲平の立ち姿を見ているので自分よりはずっと低いことを心は知っている。大体真奈佳と同じくらいだろうとは分っているが、正確には分らない。

哲平は心から視線を逸らした。言いたくなさそうに口ごもりながらも、ぼそりと呟いた。

「・・・162.6？だ」

「ゆかりちゃんは？」

「・・・」

「おいっ」

「・・・172？」

不承不承といった様子で哲平が答える。心は頭の中で簡単な計算をすると、鼻で笑った。

「それじゃあお前があと10？伸びても足りないだろ」

「ばっ・・・ちゃんと0.6？高いぞ！」

「・・・たいして変わらねーだろ」

「でも、0.6？・・・」

「それくらいは高いと言わねーよ。女なんて特にその程度はゼ口に等しいだろ。自分よりも背が高いほうが良いと言っ女なら、最低でも少しは見上げるくらい身長がないと認めねーよ」

「そんな・・・」

哲平はがつくりと肩を落とす。

「うつ・・・ゆかりちゃん」

哲平はまたもテーブルに突つ伏すようにして泣き崩れた。ずずつと鼻をすすする音が聞こえてくる。

「・・・哲平」

宗司は哲平の背中に手を添えた。

「女はゆかりちゃんだけじゃないって」

そう優しく慰める。哲平はゆつくりと顔を上げた。

「宗司」

「ちゃんと哲平の良さを分ってくれる子がいるって」

「・・・でも」

哲平はすぐるような目を宗司に向けた。

「なあ」と心は哲平の背中に話しかける。

「そんなにそのゆかりちゃんってのは可愛いのか？」

好奇心を隠しきれない様子で心が聞いた。

哲平は振り返ると、心を見る。

「ゆかりちゃんは俺の天使だ。それくらい可愛いんだ」

哲平はうつとりと思い出すように言った。

「それに」と表情を引き締める。

「ゆかりちゃんはGカップだ！」

「結局それかよ！」

阿呆らしいと、心は椅子の背もたれに乱暴に背中を預けた。興味を持った自分が馬鹿みたいだ、と少しいじけた気持ちを保持してしまつた。それがなおさら腹立たしい。

「騒がしいと思ったら、お前らか」

突然の背後からの声。

哲平たちが振り返ると、そこには寮長である衛が立っていた。腕を組み、哲平を見下ろしている。

「昨日の夜も随分と騒いでいたみたいだな」

衛は言いながら、哲平の右隣の空席に断りもなく座った。

心はその行動にわずかに眉を寄せる。

衛は機嫌良さそうに笑みを浮かべながら、心には背を向けて哲平を見た。

自分が無視をされていることが心には気に食わない。

「勝手に座るなよ」と自分の席ではないのだが、心は不服そうに言った。

衛は振り返ると、冷めた視線を心へと向ける。

「お前は先輩に対する口の聞き方を少しは勉強した方がいいみたいだな」

横柄な態度で、衛は言った。

「はっ、そんな事言ってるのかよ」

心は鼻で笑う。

「俺は真奈のファンクラブ副会長だぞ」

心の言葉に、衛は黙った。それが心の自信を増幅させていく。

「不可侵条約、知ってるよな。特にファンクラブ会員は気安く真奈に近づくな。それがルールだろ」

自信に満ちた心の言葉に、だが衛はにやりと笑った。

「それがどうした」と衛は静かに言う。

「ちょうど退会届でも出そうかと考えていたところだ。いや、出す。俺は会を抜ける」

衛ははっきりと宣言した。

「真奈佳君よりも面白いものを見つけたからな」

そう言っ、衛はちらりと哲平を見た。すぐに視線を心へと戻す。「というわけだ。これ以後、寮内でお前らにでかい面をさせる理由はなくなった。お前らはしおらしく先輩である俺をきちんと敬え」

「何を・・・ふざけんな！俺たちは生徒会だぞ！」

「お前ら生徒会は、確かに学園内では一番権力を持っているだろうがな」

「ああ、そうだ。分かってるんなら」

「寮内ではそんなことは関係ない」

衛の言葉に、心は目を見張る。

「寮内では寮長である俺がルールだ」

言い切った衛に、その潔さに「おお」と哲平は感嘆の声を漏らした。

衛の言葉はあながち間違いではないらしく、心も、そして黙って成り行きを見ていた楓すら文句を言う事はなかった。

「というわけだ」

衛は振り返ると哲平を見た。

「木ノ倉、お前がお願いするのなら今から部屋を変えてやつても良いぞ」

先ほどよりも幾分か声を和らげて、衛は哲平に言った。

「え！？マジで！？」

「ああ、真奈佳君と同じ部屋だと、何かと不便が多いだろう」

そう言った衛の言葉に、今まで黙って聞いていた真奈佳が衛に噛み付いた。

「僕は哲平と同じ部屋がいいんです！哲平と一緒にじゃないと嫌だ！可愛らしく髪を揺らしながら、真奈佳は衛に訴えた。

その姿に、言葉に、楓を取り巻くオーラがどす黒いものへと変わっていく。その様子を可笑しそうに横目で見ながら、衛は哲平に聞いた。

「どうする？木ノ倉」

選択肢は哲平にあるのだと、衛は暗に言う。

それぞれの思惑を含んだいくつもの視線が、哲平に注がれた。注目を浴びた哲平は困ったというように首を掻く。

「あー・・・いや、まあ、別に今のままでもいいっすけどね」

哲平の歯切れの悪い言葉に、衛は納得できなかった。

「無理してないか？」

「多少の無理は仕方ないかなと。集団生活するならある程度 of 我慢

と妥協は必要でしょう。それ覚悟で全寮制の高校に入ったんですから」

「確かにな」

「そんなことよりも」と哲平はまじまじと衛を見る。

「寮長つて・・・二葉のファンクラブに入ってるんすか？」

哲平がちらりと真奈佳を見て聞いた。

「入っていた、だ」

「・・・へえ」

こんなところにも理解しがたい人種がいた、と哲平は珍しいものでも見るように衛を見た。

「ん？・・・ってことは」

哲平は考えをめぐらして、ようやく合点がいったと手を叩く。

「昨日俺がきつく当たられてたのって、やっぱり二葉と同室になったことが許せなかったからっすか」

なるほど、と哲平は頷いた。

「まあ、そうなるな。気に食わないと、昨日は思っていた」

「昨日？・・・今は？」

「思っていない」

「そりゃ良かった」

哲平はへらりと笑う。恨みなど買わずに済むならそのほうがいいに決まっている。

しかし、と新たな疑問が哲平の中に浮かんた。

「何でまたそんなもんに入るんだか」

一見して、衛はある程度の常識と冷静さ、そして無駄を嫌う性格をしていそうだと哲平は見ていた。そういう人であればファンクラブなどというおかしな組織に率先して入ろうとはしない気がするのだ。

「別に他の奴らみたいに真奈佳君で妄想したりはしないがな。こんな閉鎖的な場所に居るが故の好奇心というやつだ」

衛は苦笑するように言った。

「俺にとつての真奈佳君は、そうだな、木ノ倉にとつての小。A子のような存在だったということだろうな」

「ええ!？」

衛の言葉に、哲平は大げさに驚いてみせる。何故衛が哲平の小。A子好きを知っているのか疑問だ。だが、それよりも。

「寮長つて、二葉を見てたつのか!？」

哲平は真奈佳を指差して言った。その言葉に、衛はくくつと笑い声を漏らす。

「さあ、どうかな。試したことはないから分らん」
衛はにやりとする。

「だが、木ノ倉では一度試してみたいと思っている」

「・・・俺? いや、それはないだろう」

「案外いけるかもしれないぞ」

「ないって!」

ありえない、と哲平は乾いた笑い声をたてた。衛でも下世話な冗談を言うのだと、新鮮な気持ちを抱いていく。

「ねえ!」

突然、真奈佳が会話に割り込んできた。

拗ねたような、思いつめたような眼差しを哲平に向けてくる。

「哲平、僕でも試してよ」

言われて、哲平は呆けたような顔をする。

「はあ? 何を?」

「だから・・・今、言っていたのを・・・」

真中が少しだけ頬を染めた。

ああ、と哲平は頷いた。

「たつかどうかってやつか」

「・・・うん」

「無理だろ」

哲平は即答した。

「なんで！？やってみないと分んないじゃんっ」

「やってみる必要すら何処にあるんだよ」

「だって、僕、可愛いでしょ？そこの女の子と比べたってぜんぜん可愛いでしょ」

「でも、男だろ」

「だけどっ」

「何を拘ってるのか知らねーが、無理すんな。お前は男なんだからわざわざ女みたいになる必要はないんだよ。それに二葉は俺のルームメイトでダチなんだから、そんな事試す必要はねーんだ」

分ったか、と哲平に言われて真奈佳は目を見張った。そして俯いてしまう。先ほどよりも頬が赤くなっているのは、きっと気のせいではないのだろう。

「それに、いいか。ここが重要だ」

哲平は人差し指を立てて言った。身を乗り出して、声音を落とす。

真奈佳は真剣な眼差しで哲平を見た。

「お前は小。A子じゃねー」

「・・・」

「そんなのは一目瞭然だろ」

出来の悪い子供に説明し終えた達成感のようなものを感じながら、哲平は胸を張る。

「・・・なんでそこに戻るんだろうっ」

真奈佳は肩を落として言った。先ほど感じた感動など、すでにどこかへと吹き飛んでしまっている。

斜め向かいでは、衛が肩を揺らしながら笑っていた。

「やっぱ、お前って面白いわ」

楽しげに衛は言った。

「・・・なあ、宗司」

とりあえずの緊迫した状況を逸脱した感じを受けていた哲平は、隣りに座る宗司に耳元で囁いた。

横では衛と真奈佳が世間話を始めている。特に気遣う様子を見せない両者は、それなりに悪くない関係を築いているようだった。更にその横では不機嫌そうな心があるのだが、珍しく先ほどから一言も発してはいない。一体何を考えているのか、面倒くさいので哲平は放っておく事にした。

気になるのは、もうずっと向けられ続けている殺意のこもる一つの視線だ。

「さつきから、ファンクラブ会長がすっぱー俺を睨んできてて怖いんだけど」

哲平は引きつる口元を無理やり引き結び、声を低くして言う。

その言葉どおり、楓はずっと哲平を睨みつけていた。隣で楽しげに衛と話をする真奈佳の姿が、余計に楓の苛立ちを煽っているのだが、それを真奈佳は気付かずにいる。気付いている衛はあえて気付かないふりをしていた。哲平もまた原因には気付いていないのか、しきりに首を捻っている。

宗司は、そろりと楓を伺い見て、肩をすくませた。

「自業自得だろ」

疲れたといった様子で深く息を吐き、宗司は哲平に言う。

哲平は予想もしていない言葉だったのか、宗司からすればわざとらしいほどに驚いてみせる。

「ええ！？俺が悪いのか！？」

本当に自分の非を全く自覚していなかったのか、哲平のその言葉は真剣そのものだった。

自覚がないというのは本当に性質が悪い。そういう奴ほどやつかないものだ。宗司は哲平に対しての認識を少しだけ改めた。

「今まで大方独占してこれた真奈姫が突然自分で仲の良いやつを作り出したんだ。愛しの真奈姫を奪われそうで殺気立ってるんだよ」

「いや、奪うとかないし。ってか、あの人本気で二葉に惚れてたりするのか？嘘だろ？」

「お前・・・」と宗司は呆れたように哲平を見る。今の楓の様子を

見て、どうしてその気持ちが疑えるのかが宗司には不思議で仕方がなかった。

「冗談とかありえないから。月島先輩の二葉への入れあげようはここじゃあ有名なんだぞ」

「知らねーよ、そんな事。俺、昨日ここに来たばかりなんだから」

哲平の言われて、宗司は一瞬目を見開いた。

「・・・そうだった」

「忘れてただろ」

「悪い悪い、何か哲平ってずっとここにいたみたいに打ち解けてるからさ」

「いやいや、俺ってかなり浮いてるだろ。なんせ、頭のおかしな連中がここには多いから」

哲平は未だに剣呑な視線を向けてくる周囲に視線を走らせる。

宗司は軽く哲平の肩に手を置いた。

「お前も十分おかしいから、安心しろ」

「はははっ、冗談が上手いな、宗司」

「上手いのは哲平の方だろ」

「そうかー？」

「そうそう」

「あははっ」

「はははっ」

空々しい笑い声がつむぎだされていく。

哲平は「冗談は顔だけにしろ」と目で語り、宗司は「いい加減に気付け、馬鹿」と目で訴える。だが表面上は和やかに、二人とも肩を揺らしながら笑っていた。

哲平と宗司の内緒話が終わった頃、いつの間にか真奈佳と衛は、表面上は楽しそうに笑いあっている二人に気付いて会話を止めていた。

真奈佳は拗ねたように唇を尖らせてる。一人仲間はずれにされた

気分で面白くないのだ。

衛は何を考えているのか分らないが、上機嫌とはいえない雰囲気だった。

「一番のライバルは、本田君か」

真奈佳がボソリと呟く。

「そのようだな」

衛も仰々しく頷いた。

「ちっ」と心の口から舌打ちが漏れる。それに気付いて、衛はちらりと視線を向けた。

衛の視線に気付いて心はすぐにそっぽを向いた。だが、いつの間にか視線は哲平に向けられ、そして哲平の視界に映る宗司へと向けられた。

突然の場の変化に気付いた宗司は、はっと息を呑む。真奈佳と衛、なぜか心にまで睨まれていて、宗司の顔が見る見るうちに引き攣つていった。

（何なんだ！？あんたらは！）

心の中で叫んでみても、宗司にはそれを声に出す勇氣など全くなかった。

「どうした？顔が変だぞ」と笑ってくる哲平の頭を叩きながら、宗司はこれから先を憂い、深く思いつめたため息をついたのだった。

一体誰が貧乏くじを引いてしまったのか。

波乱の高校生活の幕開けである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1129s/>

ルームメイトのお姫様

2011年4月1日14時25分発行